

---

# 生み出すもの

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生み出すもの

### 【Nコード】

N2212S

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

画家スコフコスが日本人から買った筆。その筆にある恐ろしい力とは。絵を題材にしたファンタジーです。

## 第一章

生み出すもの

アンドレアスⅡスコウフスは画家である。その描くものは実に独特なものだった。

「今度は絵はそれか」

「海に浮かぶ巨大な城な」

「しかも黄色い空か」

「しかも赤い海か」

「こんな世界か」

所謂超現実主義である。そうした絵を描くのだった。

この日は彼の展覧会だった。それで皆その絵を見て話すのだった。

「何処からこんなものが描けるのか」

「どういう発想なんだろうな」

「天才だな」

「ああ、まさにな」

こうした評価だった。マグリットやダリにも匹敵する天才だという評価を受けていた。それが彼なのであった。

その彼はだ。至って穏やかな人物だった。背が高く四角い顔をしていて青い目は細い。髪は黒がかった銀髪である。容姿は並と異なるところだ。

その彼はいつも家のアトリエで絵を描いていた。そこに妻が来て声をかける。

「ねえあなた」

「何だ？」

絵を描きながら妻の言葉に応える。

「昼食か？」

「ええ、何がいいかしら」

「何でもいい」

「こう素っ気無く返す彼だった。」

「特にな」

「何でもいいの」

「ソーセージはあるか」

「ええ、あるわよ。それにね」

「今度は妻からの言葉だった。」

「ベーコンにザワークラフトに」

「他には」

「後はジャガイモ。それとチーズよ」

「ならそれでいい」

「言いながら絵を描き続ける。その絵は。」

「果物の絵だった。林檎やバナナ、それにメロンといったものだった。洋梨もある。ただし林檎はコバルトブルーでバナナは紫、それにメロンは茶色で洋梨はスカーレットだった。そんな有り得ない果物だった。」

「そうしたものを描きながらだ。彼はふと言った。」

「しかしな」

「しかし？」

「何気にこうしたのも食べたいものだな」

「果物？それならね」

「妻は夫の言葉にすぐに答えてきた。」

「あるわよ。ちゃんと」

「いやいや、そうじゃない」

「そうじゃないって？」

「あれだ。こうした感じのな」

「あなたがいつも描いてるみたいな」

「こうした有り得ない果物があればな」

「こう言っただった。」

「食べたいものだな」

「そうね。面白いかも知れないわね」



「何？」

「何なの？」

その声に応えて子供達が集まっている声も聞こえてきた。

「何を売ってるの？」

「何をなの？」

「日本からのものだよ。さあいらっしやいらっしやい」

スコフコスもそれを聞いて声がしている方を見る。見ればそこにはだった。赤と白の日の丸まであしらった出店に黒い髪と目の若い男がいた。彫の浅い顔から彼がアジア系とわかる。

## 第二章

その彼が青い法被を着てだ。子供達に言っていたのだ。

「さて、これは」

「何それカップ？」

「持つところがないじゃない」

「これぞジャパニーズカップ、御湯飲み」

デンマークだが英語も入っていた。

「我が国の誇る文化の一つだよ」

「日本って何？」

こんなことを言う子供もいた。

「何か学校の授業で習ったけれど」

「ほら、あの国だよ。東の方にある」

「あの島国じゃない」

「お金持ちの」

他の子供達がその子供にこう教える。

「あの国だよ」

「何か着物着てるっていう」

「お魚を生で食べる国だよ」

「そう、その通り」

ここで元気よく言うその日本人だった。

「それがお兄さんの国なんだよ」

「ふうん、お兄さんそこから来たんだ」

「日本から」

「そう、はるばる来ましたデンマーク」

日本人はさらに話す。

「いやあ、ここは寒いねえ。雪は降ってるし」

「デンマークって寒いよ」

「ねえ」

「ヨーロッパの北の方にあるし」  
「それは仕方ないじゃない」  
「いや、それでも商売に来て」  
日本人は子供達の話の半分以上受け流しながら自分の話を続ける。  
「このカップを君達にプレゼント」  
「ああ、売ってくれるんだ」  
「そうしてくれるんだね」  
「他にも日本のものが色々あるよ」  
「どんなの？」  
「どんなのがあるの？」  
子供達はその言葉を聞いてさらに話すのだった。  
「それだけけれど」  
「他には」  
「何があるの？」  
「これとか」  
今度はだ。扇だった。そして他には。  
「これもね」  
「ああ、それって確か」  
「下駄？」  
「それだよ」  
「そう、日本の履くものだよ」  
こう子供達に宣伝するのだった。  
「これもどうか。とにかく日本のものなら何でもあるよ」  
「ふうん、面白そうだね」  
「じゃあ買ってみる？」  
「そうする？」  
「今買えば安くつくよ」  
日本人はここぞとばかりにこうも言った。  
「さあ買った買った。遠慮はいらないよ」  
「遠慮なんてしないけれどね」

「じゃあ僕この御湯飲みつていうのをね」

「私は扇」

「僕は下駄にするよ」

子供達はそれぞれ小銭を出して買っていく。そうしてそのうえで買っていった。後にはホクホクとした顔の日本人が残った。

その彼の前にだ。スコフコスはふらりと出た。それから彼に問うのだった。

「見ていたが」

「はい、何でしょうか」

「日本のものを売っているのだな」

「ええ、そうですよ」

日本人は気さくに笑って彼に応えた。

「この通り。あらかた売れちゃいました」

「君は日本人なのか」

「そうです。欧州を行商しながら旅してはるばるここに流れ着いて」

「それでどうして日本のものを持って来た」

「あつ、実家が骨董品屋です」

彼はスコフコスにこのことも話して。

### 第三章

「それでなんです」

「それでか」

「家から持って来てです。そのうえで売ってたんです」

「それでか」

「その通りです。まああれです」

日本人は多分に愛想のが入った気さくな笑みでスコフコスに  
応える。

「日本って国は色々なものがあるんでそれを売れば」

「金になるか」

「はい。それでどうですか？」

日本人はスコフコスに対しても言ってきた。

「何か買われますか？」

「売ってくれるのか」

「それが仕事ですから」

だからだというのだった。

「それでなんですけれどね」

「そういうことか」

「ええ。それじゃあ何か買われますか？」

「そうだな」

日本人の言葉に乗ってだった。スコフコスも言っのだった。

「それならな」

「それなら」

「筆か何かあるか」

彼が言っのはそれだった。

「描く為のものが欲しいのだが」

「あっ、ありますよ」

こう返答が来た。

「硯でも何でも」

「硯といえば」

「まあ日本の墨は聞いているでしょうか」

「名前はな」

芸術家としてだ。それは聞いていて知っていたのだ。

「黒い。それで文字や絵を描くのだったな」

「その墨を入れるものですね」

「そうだな。それを買おう」

「毎度あり」

「それとだが」

その硯を買うと決めてからだ。スコフォスはさらに言うのだった。

「他には。筆は」

「それもですね」

「あるか？日本の筆が」

「はい、勿論ですよ」

若者は笑顔で彼に答えてきた。

「それもとびきりのが」

「とびきりか」

「年代ものです。百年筆です」

「百年か」

「ええ。うちは骨董品屋ですから」

それが理由だというのだ。

「そうしたものもあります」

「そうか。しかし作られてから百年の筆か」

スコフォスはそのことに驚いていた。彼はそこまで古い筆など持っていないかったし使ったこともないからである。それだからだ。

「それはまた凄いな」

「筆ですからそんなに高くないですしね」

「値段も安いのか」

「はい、筆ですから」

またそれを理由にしてきた。

「ですからそんなには」

「そうなのか」

「それでどうされますか？」

若者はあらためて彼に尋ねてきた。

「買われますか、その筆を」

「そうだな。そうさせてもらうか」

スコフコスは彼の言葉に頷いた。それで決まりだった。

こうして彼はその先が流線型になっている筆を買った。如何にもアジア系といった筆であった。その筆を手に自宅に戻ってだった。

すぐに絵に取り掛かる。その不思議な色の果物達を描いていく。

その時にだ。今さっき買った筆のことを思い出したのだった。

「そうだな折角買ったんだしな」

こう思ってた。それからすぐだった。

その筆を取り出してそうしてである。絵の具を付けて使ってみた。すると。

## 第四章

描いたそばからだった。その果物達からだ。

絵から浮かび上がりそのうえでだ。そこからこちらの世界に出て来たのである。それを見てだった。

「まさかと思うが」

その果物達を手で触ってみる。実感があつた。

そこからようやくわかつてだった。彼は妻を呼んだのだった。

「どうしたの、一体」

「これを見てくれ」

こう言つてだった。彼女にその果物を見せたのだった。それを見た彼女は。

最初はいぶかしむ目だった。しかしすぐに驚いた目になってだ。夫に言うのだった。

「まさかそれって」

「そのまさかだ。絵はだ」

真っ白になっていた。その中であつたものがそのまま外に出てしまったからだ。

「この通りだ」

「絵の中のものが出て来たの」

「信じられるか？」

「普通は信じないわ」

まずはこう返す妻だった。

「けれど。それを見たら」

「信じるしかないんだな」

「ええ」

その通りだと夫に答える。その不思議な色の果物を見ながらだ。

「そうよ。それを見たらね」

「そうだな。俺もだ」

「あなたもなの」  
「さつき街で日本人から買った筆を使った」  
「そうしたらなの」  
「作られてから百年と聞いた」  
「夫は妻にこのことも話した。」  
「それでだ」  
「絵の中のものが出て来たの」  
「正直信じられない」  
「スコフコスはここでこう言ったのだった。」  
「こんなことになるなんてな」  
「そうよね。けれど」  
「けれど。何だ」  
「それ、どうなのかしら」  
「妻はいぶかしむ顔で夫に述べてきた。」  
「その果物。どうなのかしら」  
「食べられるかどうかか」  
「ええ。食べられるかしら」  
「毒はないと思う」  
「とりあえず思ったことをそのまま妻に述べた。」  
「ただし味はだ」  
「わからないのね」  
「それは食べてみないとわからない」  
「その通りのことだった。それを今妻に話した彼だった。」  
「だからな」  
「そうね。実際にね」  
「食べるか」  
「ええ、そうしましょう」  
「こうしてだった。その果物達を切って二人で食べてみる。その味は。」  
「色はおかしいけれどね」

「味はまともだな」

「そうね」

妻は夫の今の言葉に頷きながら返した。

「これはね。同じ味よね」

「普通の林檎やバナナの味だな」

「それは変わらないのね」

「色は違っても林檎は林檎だ」

スコフコスはその林檎を食べながら述べた。半分には切られたそれを右手に持ってだ。その変わった皮ごと食べているのだった。

色がおかしいのは皮だけだった。中身は白いれっきとした林檎だった。それを食べながらだ。彼は妻に対して言うのだった。

「それはな」

「そうね。特にね」

妻はバナナを食べていた。

「全く普通よね」

「そうだな。それじゃあ」

「ええ、普通に食べていいわね」

「それとだ」

「それと？」

「筆のことだな」

彼がここで言うのは筆のことだった。

「とにかくこれで描けばその描いたものがだ」

「こつちの世界に出て来るのね」

「まず食べ物が出て来る」

「とりあえず食べるものには困らないわね」

「金を使わなくても食材が手に入るからな」

「ええ。それだけじゃなくて」

妻は夫の顔を見てだ。そして話すのだった。

## 第五章

「あなたの描いた絵がね」

「こちらの世界に出て来るな」

「これって凄いことよ」

妻の顔は上気していた。そのうえでの言葉だった。

「あなたの現実には有り得ない絵がこちらの世界に出て来るなんて。夢みたいだな」

「いや」

しかしだった。ここで彼は言うのだった。

「それはどうか」

「どうかって何かあるの？」

「なければ言わない」

彼は真面目な顔でこう妻に話した。

「それはな」

「そう、それじゃあ何があるのかしら」

「出さない方がいい」

彼は言った。

「俺の絵はだ。こちらの世界に出さない方がいい」

「どうしてそう言うの？」

「俺の絵はだ」

どういったものかをだ。妻に話した。

「現実にはないものを描くものだな」

「ええ、それはね」

そのことは妻もよく知っていた。それで夫の今の言葉に頷くのだ。つた。

「そのことはね」

「そうだな。だからだ」

「だからって？」

「こちらの世界に出るべきじゃない」  
「こう言うのだった。」  
「現実の世界にはな」  
「現実にはないから」  
「ああ、そうだ」  
「だからこそなの」  
「それでこうしてこちらの世界に出てはだ」  
「苦い顔になってだ。そのうえでの言葉だった。」  
「何にもならない」  
「じゃあどうするの。この果物は」  
「それは食べる」  
「食べることはいいというのだった。」  
「だが、だ」  
「絵はなのね」  
「もうこの筆では描かない」  
「そうするのだった。」  
「二度とな」  
「そうなのね」  
「しかし。百年の筆か」  
その筆を見ての言葉だった。口調はしみじみとしたものになって  
いた。  
「凄いものがある」  
「その日本人から買ったものね」  
「歴史のある国とは聞いたがな」  
「その中にはそうしたものもあるのね」  
「全く。思わないものがある」  
「スコフコスはまた言った。」  
「それが手に入ったのは凄いことだがな」  
「でももう使わないのね」  
「そうする。とりあえずこの筆は」

「どうするの？持っておくの？」

「俺は使わない。だからいらない」

素っ気無い言葉だった。使わなければ意味がないというのだ。

「だからこれはな」

「ええ、その筆は」

「バチカンにでも寄付するでしょう」

彼はカトリックだった。その信仰は中々深いものがある。それで宗教画も描いていたりする。その方面でも知られているのである。

「あそこならすっかりと収めてくれるからな」

「それでなのね」

「そういうことだ。そうするでしょう」

筆をどうするかも決まったのだった。筆はバチカンの書物庫に収められそうして絵のことは終わった。スコフコスは絵を描き続けた。

そして時折コペンハーゲンの街に出るとだ。その日本人は。

## 第六章

何時の間にか出店からしっかりとした店になっていた。そうして骨董品や日本の品を扱っているのであった。

そこに入るとだ。彼を気さくな笑顔で迎えてこう言つたのだ。

「いらつしゃい。今日は何を買われますか」

「また急に店が大きくなつたな」

「まあ。商売が成功しましたから」

「日本人は商売上手と聞いているがな」

「いやあ、運がよかつただけです」

日本人の若者は自分の左手を頭の後ろにやって笑顔で話す。

「それだけです」

「謙遜か？」

「いえ、事実です」

それだといふのである。彼はだ。

「まあそういうことなんで」

「そう言つか」

「はい。それでなんですが」

「何を買いに来たかだな」

「これなんかどうですか？」

言いながら出してきたのはだ。紙の傘だった。

「日本古来の傘ですけど」

「何年ものだ？」

「百五十年に作られたものです」

若者は笑顔で彼に話した。

「凄いですよ、これも」

「そんなものがよく売っていたな」

「日本には色々なものがありますから」

「それはいいのだが」

スコフコスは難しい顔をして述べた。

「だがな」

「だが、といたしますと」

「この前の筆だが」

その話をだ。若者にするのだった。

「あれはとんでもないものだったぞ」

「あれっ、そうだったんですか」

「何も知らなかったのか」

「って何かあつたんですか？」

若者は首を傾げさせながらスコフコスに問い返した。

「あの百年ものの筆に」

「何も知らないのか」

「ですから何が」

「知らないのならいい」

それ以上は言うことを止めた彼だった。その表情と目から彼が本当に何も知らないことを察したからだ。それでなのだった。

「それはな。ただ」

「ただ？」

「もうそつした古いものはな」

「それは？」

「売るな」

こつ彼に忠告するのだった。

「わかつたな」

「そつだ、売るな」

真剣な顔で彼に述べる。

「何かと厄介なことになるぞ」

「そつなんですか。まあそつ言うのなら」

若者もだった。彼の言葉に何かを感じてだ。そつしてそのついで  
応えるのだった。

「止めますけれどね。他のものも売ればいいんですし」

「そうしてくれるか」

「はい、いいです」

また言う若者だった。

「何かあるみたいですよしね」

「そういうことだな」

「やっぱり古いものって何かあるみたいですね」

若者は考える顔になって述べた。

「人間の世界じゃ簡単に話せないことが」

「そうだろうな」

筆のことは隠してだった。スコフコスも話す。

「それはな。まあそれでだ」

「はい、それで」

「その傘の他に何かあるか」

その百五十年ものの傘が収められるのを見ながら話す。

「見せてくれるか」

「ええ、それならですね」

若者は棚から日本のものを次々に出してきてスコフコスに見せる。スコフコスはそれを見てからだ。そのうちの何点かを買ったのだ。た。

その店にはそれから何度も通ったが二度とそうした異変は起こらなかった。その店の周りでもだ。話はスコフコスと妻の中だけで終わったのだ。絵のことは。

生み出すもの 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2212s/>

---

生み出すもの

2011年4月4日21時55分発行